

読みとり付加型あらすじ作成

—宮澤賢治「狼森と筑森、盗森」編—

岡田 浩 行*

(2021年12月23日受付, 2022年1月13日受理)

第1章 読みとり付加型あらすじの作成の取り組み

(1) 本実践の目的

本稿は、東京にある私立の中高一貫制の男子校において、2019年度、中学一年生を対象に国語の授業内で筆者自身が行ったあらすじ作成の取り組みに関する報告および考察である。

○**本実践の目的としての物語の意味化** 文章理解力を養う方策としてよく知られているのは、「要約」であろう。評論文はもとより、小説についても、例えば、物語に「初期設定」・「出来事」・「結末」という三つの要素を認め、それをつながりのある文章に直すといった活動が行われてきている(工藤順一(2007)、工藤順一(2010))。「Aが、あれこれの末(あれこれの理由で)、Bになった」という「物語の原型」を抽出するのである。一作品の少ない言語情報を、結末に至る文脈として集約する意識を持たせることは、小説の読解力の向上に資するであろう。

だがその上で、もう一つ課題を提示したいのである。

小説で授業をした際、しばしば、「言っていることは分かるが、意味が分からない。」といった感想を聞く。こうした感想は、なるほど一見、小説の細部は理解できるが全体的に結末へとどう集約していいか分からないことを訴えているようである。だが一方で、生徒のそうした感想が、何かしら物語世界内の細部の文脈(部分と部分の関連づけ)の読み落としに起因している、換言すれば物語の意味化が十分でない結果であるということにも、同時に気がつくのである。

そこで一文要約の取り組みではなく、細部の文脈化を指向する読みとり付加型のあらすじの作成を課そうと思いついた次第だ。

(2) 本実践の概要

○**読みとり付加の方法** 中学生対象の学習上の用語として、その細部の文脈を、〈隠されたストーリー〉と仮に言っておく。〈隠されたストーリー〉の累積が小説の意味となる。そ

* 岩手大学教育学部

の意味理解を喚起する方途として、あらすじ作成を行うのだが、その作成過程で細部の文脈に気づいたら、それをあらすじ内に記述する。そうしたものを本稿では「よみとり付加型あらすじ」と称する。

無論あらすじである以上、物語世界内の出来事の集約、抽象化を行うのである。しかし読解力の課題が細部の意味化にあるとすれば、一意的に略記する体のあらすじでは、かえって問題点を助長しかねない。そこで生徒には〈隠されたストーリー〉に気がついたならそれを書き込むように指示する。出来事を略記しつつ、その意味を同時に付加する、そういった作業工程が想定される。

あらすじを書きながら、そうした文と文、語と語の連関への気づきを活性化させたい。そのために、いわば遂行的に読みとりを挿入していくこと、換言すれば小説を自ら書き直すような体験が必要だと思うのである。こうした実践の裏面にあるのは、本当に「言っていること」が分かっているのか疑い、もう一步、文と文、語と語の連関を読みとろうとすること、そういったねらいである。

次章以降で取り扱う〈隠されたストーリー〉は、すべて小説世界の隠微な結節点を認識する読みとりの例である⁽¹⁾。

○あらすじの分析・評価 本実践報告を論文化するにあたり、生徒たちのあらすじを分析・評価する手立てとして、あえて表1のとおり形象間の連関を分類・整理することとする。本活動をとおして明らかになった生徒の読みとりの偏向、あるいは次第に高まっていく読みとりの志向性を、明示的に記述するためである。

まず「連関」(Ⅰ)と「単独」(Ⅱ)との区別である。

「連関」は、意味化の上で認められる形象相互の繋がりを指す。語用の状況上、この中に位置的な区別〔I a〕、内容的な区別〔I b〕、論理的な区別〔I c〕を立てる。さらにそれぞれ近接1／遠隔2、共通・類似1／相違・対照2、因果1／反復2／対句3／対比4／例外5／矛盾6に細分化する。

「単独」は、連辞関係による明確な意味を(少なくとも表面上は)持たないもの、単独で意味作用を担う形象を指す。読みとりの上では、文脈の中で違和感を抱かせる箇所である。したがって語用の状況的な区別はできない。ただやはり伝統的な文学的技法としてイ、物語世界固有の決まり事、ロ、額縁、ハ、外部(情報の参照)の区別はできる。文脈上特異な箇所であることから、「単独」もあらすじで落とせない事項となろう。

表1：相関分類

連関Ⅰ	
I a1/2 (a1:近接/a2遠隔)：位置的な区別	
I b1/2 (b1:共通・類似/b2:相違・対照)：内容的な区別	
I c1/2/3/4/5/6 (c1:因果/c2:反復/c3:対句/c4:対比/c5:例外/c6:矛盾)：論理的な区別	
単独Ⅱ	
Ⅱイ：物語世界固有の決まり事	Ⅱハ：外部(情報の参照)
Ⅱロ：額縁	

○あらすじ作成の対象作品 次にあらすじ作成の対象とした小説について。宮澤賢治の童話集『注文の多い料理店』（杜陵出版部、大正13・12）から「狼森と笹森、盗森」、「水仙月の四日」、「山男の四月」、「月夜のでんしんばしら」⁽²⁾の四篇をピックアップし、一年かけて順次あらすじの作成を行った。

本稿では、まず第一回「狼森と笹森、盗森」のあらすじ例の分析と評価から、生徒たちの読みとりの課題を探る。

第2章 「狼森と笹森、盗森」における自然と人間との関係性に関する読みとり

(1) 人間に対する森の優しさ

宮澤賢治「狼森と笹森、盗森」は、小岩井農場の北に実在する森が点在した地域に入植してきた開拓民たちと、森たちとの交情を描く。入植直後三度にわたって開拓民たちに事件が降りかかる。その後、森、あるいは森の住人の事件への関与が判明する度に、翌年の狼森、翌々年の笹森、最後に黒坂森と盗森が、人間たちから粟餅の供出に与る経緯が、近代になって黒坂森の巨きな巖によって語られていくのである。

これまで同作を論じた先行研究では、人間に対して相反する評価がなされている。すなわち「自然と人間の交流し合う世界」（岡屋昭雄（1995），p.63）や「自然という神への畏敬」（関口（2008），p.196）といった自然に拝跪する人間か、逆に「現在の悪」（山内修（1991），p.69）・「人間の持つ根源的悪」（中野隆之（1993），p.210）といった自然に対し驕りを見せる人間である。この相違は、開拓民が入植時に自然に許可を願った前半の場면을重視するか、人間たちが森に供出する粟餅が縮小化されたことを語る最終場면을重視するかの差であるが、研究的には『注文の多い料理店』全篇の理解に関わる作家論にも繋がる。ゆえに論調は後者に傾く傾向にある。⁽³⁾

なるほど物語内容を語るのも、黒坂森の巨巖から聞き書きする「わたくし」人間であり、「わたくし」が想定する読者も人間、それも近代の人間である以上、人間を焦点化するのには必然でもある。しかし気になるのは、賢治自身の自作解題で、「人と森との原始的な交渉で、自然の順違二面が農民に与へた永い間の印象です」（宮澤賢治『注文の多い料理店』広告ちらし（小）、大13・11）と語られている、農民たちの記憶中の「自然の順違二面」の印象とは何かである。その場合の自然とは、近代の読者によってつかまれる前の物語世界内の「自然」である。まずはこの確認から行う。

○働く人間を見る森—〈隠されたストーリー①〉 本作で自然はどう造形されているか、小岩井農場の四つの森とその住人の造形から考察する。

まず森そのものの造形である作中の四つの森たちからして、人の面影を感じさせる造形となっている。特に開拓民たちへの優しさは、四つの森に通底している。森の人間への優しさは、開拓民たちを冬の北風から「一生懸命」防ぐことにすでに顕著である。そして森たちが、人間に優しくすることには、小岩井農場を拓く開拓民たちの働く姿勢が与っている。「次の日から、森はその人たちのきちがひのやうになつて、働らいてゐるのを見ました。（中略）その人たちのために、森は冬のあいだ、一生懸命、北からの風を防いでやりました」、と。まず、論理関係から文脈として措定しうる、この森の人間への心情が、読みとりの〈隠されたストーリー①〉としたい。

○誕生後からの森の変化―〈隠されたストーリー②〉 森たちの人間へ向けた優しさにまず注目したのは、森が、誕生直後はそうではなかったからである。岩手山の噴火後は、「森にはまだ名前もなく、めいめい勝手に、おれはおれだと思つてゐるだけでした。」と、自分勝手にさえあったのだ。森たちの斯様な変化の理由を指摘した論は未見である。⁽⁴⁾人間は森たちに礼を尽くし、かつ一生懸命労働に励んだ。一方森たちもそんな開拓民たちを見て自分勝手な意識を改め、協同的な姿勢へと態度を変化させた。そうした相互に真摯な姿が垣間見えると言つていだろう。

以上、森の原初の姿からの変化を、〈隠されたストーリー②〉とする。

○子供を励ます狼森―〈隠されたストーリー③〉 そしてもう一つ、この森の優しさが、最初の狼森の事件を惹起した点が肝要であろう。続いて森の住人の考察に入ろう。

森の住人とは、狼森では狼、笹森では笹とその中に隠れていた山男、盗森では大男である。こうした住人は森の「人間化された自然」(小森陽一(1996), p.61)の表象とされる。また一方、森の依代・尸童とも見られよう。確かに森の住人が居て、人間に森との交通を辛うじて可能にしている点では、尸童であり森の「人間化」、広い意味での森の擬人化である。(こうした森の擬人化を、人間による自然支配や、宗教化の文脈で捉えることも可能だが、本稿では、後述するとおり、言葉の遊びの機能として捉え、擬人化の意味作用に民俗学的な外部的コンテクストは措定しない(3章(2)).)

さて、狼森の事件とは、入植者たちの「九人のこどもらのなかの、小さな四人がどうしたのか夜の間に見えなくなつ」たという出来事であり、やがて狼森の住人である狼の関与が判明する。

この子供等の失踪については、「狼森と笹森、盗森」論において種々の解釈が立ちあげられてきた。それは民俗学的なアプローチを主とし、「神人共食の宴」(谷川雁(1985), p.69)という棄て児の儀礼的な習俗とする見解と、「困童」が異界と媒介することによる「共同体の起源」(赤坂憲雄(1990), p.159)とする見解に大別されよう。「共食」の理解は、狼たちが「ご馳走した」という物語世界により基づくため、「共食の儀式」によって「親密な関係」(中野隆之(1993), p.212)が、あるいは「共助関係」(関口安義(2008), p.197)が築かれた等と、その後受け容れられていく。

ともあれ、当然入植時にいた「五つ六つより下の子供が九人」の幼児らの内、なぜ失踪者が「小さな四人」に限定されたのが問題となる。その四人の子は、澤田由紀子(1995)、小森陽一(1996)の指摘のとおり、前年に入植した年の冬、森が北風から人間達を守ったが、「それでも、小さなこどもらは寒がつて、(中略)よく泣きました。」という子供らとすべきだろう。なかでも、澤田由紀子(1995)では、「共食」の文脈を設定し、子供らに「冬を越す力」を与えようとしたとされる(p.72)。「共食」といった外部情報⁽⁵⁾の過剰な参照は抑制すべきだが、「小さな」という(表現上は近接しているが時間的には離れた)部分と部分との連関(共通項)に着目することで、前年の冬に寒さで特に辛い思いをした「小さな」子供らを、「その年の秋」、即ち収穫の時期でありかつ冬が本格化する直前に、狼たちが歓待したという文脈が顕わになる(本稿の分類でI a2b1c1)。森たちの、入植当時の人間たちを庇護する関係性というものが意味化されるのである。

以上のように確認できる森たちの変化の裏面には、協同して開拓に励む人間たちに対する、森たちの共感があると言つてよい。この森の変化は、後述するとおり(2章(2))、共

読みとり付加型あらすじ作成

同体の生成とは、人間の働きかけをきっかけとしながら、人と自然との間に互酬的な関係性を築くことであることの、森(自然)側の文脈を物語っている。

ともあれ、ここでは、岩手山を除けば森たちも共同体の一員として相対的であり、決して無謬で完全な存在とすべきでないとするのが妥当だということのみ、付言しておく。「小さな」という結節点を根拠とした森の庇護を、〈隠されたストーリー③〉とする。

○あらすじの分析 次にあらすじ作成活動をとおしての、生徒らの作品冒頭に関する理解を考察する。

まず〈隠されたストーリー①〉である。

ここは「その人たち」と指標辞があり、指示内容は開拓民一丸となって働いているという直前の箇所であるから、頑張っているのが北風を防いだという経緯は読みとりやすいと思われる。(共通事項の本稿での分類はb1)

- 【1】次の日から森たちは人たちが真面目に働いているかを見ていました。その働いている姿を見て、森は人を信用しました。森は人のために冬、一生懸命北の風を防いでやりました。〔I a1b1c1〕
- 【2】次の日からは皆仕事にはげんでいた。それを見た森は、皆を応援しようと北からの雨風を防いだ。〔I a1b1c1〕

森が北風から開拓民を守った場面を記述した生徒は55名(26%※あらすじ総数は213)。「【1】【2】の生徒のように、一生懸命な開拓民の姿を見たことを森が人々を守ることを結果したと捉えた生徒は15名(7%)という結果であった。

次に〈隠されたストーリー②〉である。

連関する部分と部分とに距離がある中で、森の対比的な性格を読まねばならず、なかなか気づけないことが想定される箇所だ。(b2)

- 【3】噴火がしづまり南の方から草が生え柏や松も生え今の四つの森ができました。この時はまだ名前はなく、おれはおれだと勝手に思っているだけでした。〔1a2b2c4〕

果たして、開拓民に協力的になる森の変化を捉えた生徒はいなかった。「【3】の生徒のように、作中冒頭に書かれた原初の森の自己中心性について記述した生徒が19名(9%)。名前が無かった事実のみ記述した生徒でも34名(16%)という結果であった。

最後に〈隠されたストーリー③〉である。

「小さな」という結節点に気づくためには、物語の部分と部分との連関の指標となる、同語反復や類義語に注目する必要がある。さらに当該箇所では、なぜ「四人」だったのか、という範列的な思考が解釈上必要である。

- 【4】あくる日人間の童がいなくなっていました。しかし狼森に知っていることを知って行ってみると狼たちが泣いていた童たちを元気付けてやろうとしているかのように栗だのきのこだのを、ご馳走していました。〔I a2b1c1〕
- 【5】一年目の秋には狼のいる狼森の狼が寒いと言っている子供をあたためようとつれ

さり、それを大人たちが探しに行きました。〔I a2b1c1〕

幼児の失踪と狼たちによる饗応については、189名(89%)と、大多数の生徒が言及しているが、前年の冬に寒さで泣いた幼い子どもらを特に饗応したことまで記述した生徒は2名(1%)という結果だった。

○分析結果まとめ 北風を防いだ森の側の優しさには気づいても(26%)、その気持ちが協同する人間たちに向けられていたことまで気づいた生徒は少ない(7%)。次に「めいめい勝手」な森に言及しても、そこから今の優しい森へと変容したという文脈に繋がらない(0%)。そしてさらに、その優しさから子供を歓待したという文脈が理解されにくい(1%)。以上、森と人間との関わりが築かれて行くという意味理解が不十分だと言える。

内容的な対比しか連関の手立ての無い〈隠されたストーリー②〉より、①と③のように指標のある方が文脈を把握しやすいとは言えそうである。よって、今後の実践では、近接から遠隔へ、指標有りから無しへという気づきの深化を意識させることが課題だと考える。

(2) 人間の森に対する謝意

○収穫儀礼の確立—〈隠されたストーリー④〉 前節で見た森の変化から、「狼森と策森、盗森」が提示する重要な点に、狼森に影響を与えているのが人間だという事実がある。共同体とは、森といった環境も含めたもので、その形成に人間はむしろ主体的に関わっているのだ。だが人間の関与は悪とは捉えられなかったのだろうか。それには物語世界内の三つの事件の意味を是非捉えねばならない。

開拓民たちの身に三度にわたって事件が降りかかり、そのつど森への探訪と粟餅の供出が反復される。その三度の繰り返しが、三度目に破綻する展開は、「昔話の法則」(中野隆之(1993), p.211)とされる。その話形は、各話の共通点も相違点も、ともに浮き彫りにする形式であるはずだ。では、各場面の累積によって、何が意味されるか。

先行研究では、三つの事件は開拓民の農耕のプランを開示するとされる。一年目の「蕎麦」と「稗」の作付は、佐々木高明(1971)『稲作以前』によれば、成育期間が極端に短くて済む「蕎麦」と、粟に比べ収量が多くて冷涼な気候に強い雑穀栽培地域でしばしば主食となる「稗」ということであった(p.95-110参照)。「稗」は「救荒食糧」で「馬の飼料」ともなる(谷川雁(1985), p.65)。以上から判断するに、「蕎麦」と「稗」の作付は、おそらく入植を安定化させるための選択とみられる。これを踏まえると、小森陽一(1996)で示された、最初に狼森に供出した粟餅だけが収穫物でなく翌年播くはずの「種粟」で作られたという事実が顕在化する。佐々木高明(1971)によれば、日本の稲作以前の農耕において「アワがもっとも重要な作物の一つ」(p.110)なのであれば、誠に人間の森に対する謝意は明瞭なのである。

以上に、三つの事件がすべて秋に起こっていることを考えあわせれば、粟餅の供出が収穫の儀礼に関わるという意味が立ちあがってこよう。すなわち物語世界が示唆するのは、収穫儀礼のはじまりのイメージである。

たしかに三つの事件の人間の対応に、このあとすぐ検討するような抵抗も見出せるのは事実だが、人間の粟餅の供出のなかに、収穫に対する「自然」への感謝の気持ちが間違いなくあることを忘れてはならない。黒坂森の巨巖が語って聞かせるのは、開拓民の入植か

ら始まった人と森との互酬的な関係が秩序化された経緯の物語だと、本稿では考えるのである。

話を戻すが、収穫儀礼の読みとりが前提としているのは、事件がすべて晩秋から初冬にかけて、換言すれば収穫後に起こっているということ、および各事件を境に人間がそれぞれの森に共通して粟餅を供しているということの読みとりであろう。ゆえに、自然への感謝と畏れから秋の収穫儀礼を確立するというのが、〈隠されたストーリー④〉となろう。

○人間と自然との間の衝突―〈隠されたストーリー⑤〉 一方で、すでに触れたように、開拓民の自然に対する抵抗の姿があることも事実である。「狼森と叢森、盗森」中の開拓民は、時に自然に向かって対立姿勢を顕わにする。人間は自然に拝跪しているのか、それとも驕っているのか。

昔話の話型としての三度の出来事の反復のなかでも、むしろ微差を注視することは読みとりの手立てとして妥当なのだが、その結果、次のように人間の違背が指摘された。

すなわち砂の混入を、中野隆之(1993)では「人間の根源的な悪」(p.215)の萌芽だとする。澤田由紀子(1995)は、開拓民が盗森に行く際の持ち物の表記が「え物」であることに「狼森や叢森の場合とは異なった緊迫感」を看取し、砂の混入を「人間側からの森(自然)への処罰」(p.80,85)とする、といったように。

斯様に森に対する人間のネガティブな心情が意味化されてきたのは尤もなことのように入る。少なくとも、「え物」・「砂」の連関を読みとることは、教科教育上の問題であり、よって本稿でも、「え物」と「砂」への記述から三つの事件の間に開拓民の対立意識が高まったとする理解を〈隠されたストーリー⑤〉とする次第だ。

しかしこの開拓民のネガティブな心情の、小説全体における意味の理解については異論がある。今更めくが、人間たちの穏やかならぬ心情が表出されるのは二度で、一つは物語世界(入植三カ年)、もう一つは語りの現在(額縁としての近代)である。この差異は当たり前のことだろうか。だが、存外等閑視されてきたように思えてならない。

中野隆之(1993)では、「粟餅を持っている者が一番偉いと考えはじめている」(p.212)とし、澤田由紀子(1995)では、「自然の大きな宇宙的秩序と人間たちとの乖離」(p.88)は、盗森の事件を機に「原初の秩序には同調できなくなっている」(p.84)ことに萌しているとし、小森陽一(1996)では、開墾さえ「ジェノサイド」(p.43,59)と見なすに至っている。そしてこの理解が研究史的な趨勢であるとも言えるのだ。

なるほど人間が自然に対しネガティブな心情を持つことは、自然界の秩序に対する重要な違背となろう。盗森に供出した粟餅に砂を混入するなど、「岩手山の宣告にもそむくことになる」のであり、絶対であるべき「岩手山の神聖」への冒瀆ともなりかねない(谷川雁(1985), p.77)。(6)ただ以上は、語りの現在(近代)における粟餅の縮小化との連関を過剰に見出す遡及的な理解、換言すれば物語世界(入植三カ年)と、語りの現在(額縁としての近代)との差異を混同した読みではないかと思うのだ。

本稿では、黒坂森の巨巖の言葉どおり、入植三カ年間は「森もすつかりみんなの友だち」となるまでの経過期間とすべきで、人間が非自然化の姿勢を見せる近代の文脈とは区別すべきだと考える。黒坂森の巨巖の言説が信頼できない謂れはないし、仮に開拓民たちが入植三カ年にして自然への畏怖に疑問を少しでも抱いたならば、その後永く、恐らく年によって収量の多寡があったであろうのに、毎年粟餅の供出を続けられはしないだろう。

入植当時の開拓者たちが「え物」を携えたり、砂を混入させたりなどと対立姿勢を示したのは、森への畏怖や「種粟」に見られた謝意を失ったからでない。「え物」や砂の混入が事実でありながら開拓民たちの森への謝意も真実なものとするれば、人間は入植の初期にこの山間の地に居場所を見出したのだが、それは森たちとの誤解や疑念・衝突を経てであったということだ。忘れてならないのは、「和解しがたい関係にかりうじて折り合いをつけるためにこそ、儀礼や祭りが必要とされる」（赤坂憲雄（1993）, p.123）ということである。あくまで収穫儀礼が慣習化されるか否かという物語世界の当時、相互に相容れないからこそ相互に関係を模索するものなのではなかろうか。その結果互いに包み隠すことのない「友だち」となりえたのであり、粟餅の供出がその宥和を定着し得た、即ち儀礼が慣習化するに至ったのである。

ゆえに入植三カ年の人間と自然との衝突は、単に入植の困難さを表す、人間と自然との関係性で言えば、場合によって対立しかねない関係にあることのみを示すと考える。斯様な本稿の理解からすれば、「甘やかな神話語り」（赤坂憲雄（1993）, p.124⁽⁷⁾）や「黄金時代」（山内修（1991）, p.69）の創出、あるいは「人間と自然との交流、自然という神への畏敬」（関口安義（2008）, p.196）を認める先行研究に同意したい。（しかし、このような入植三カ年についての理解を示す先行研究についても、語りの現在を踏まえた批判的な人間理解を示す点には異論がある。粟餅の縮小化は、共同体の起源の、むしろ起源化を指示していると本稿では考えている。）

自然の先述したような変化（2章(1)）や、またこの収穫儀礼によって人間に泥む森の姿は、なるほど「人間化」と言える。しかしここから人間の驕りを捉えるのは、やや自然対人間の生硬な主客二元論のように思う。そうではなく、自然は人間の庇護者たらんと自ら態度決定したと考えるべきではないだろうか。と同時に逆に、自然との交通で人間も「人間化」を果たしたに違いないのだ。すなわち森の、時に恐ろしくもユーモアのある等身大の姿（賢治の言う「自然の順違二面」）に触れ、自然の有り難さを知り、そうした関係性におかれた存在として自己定義していくのだ。

森は自発的に変わり、選択的に自ら好んで影響を受けている。人間も自然のなかに「人間化」して定着する。人間は森に影響を与えたに違いないが、その影響は人間にとって目的的に目指されたものではないだろう。一方、森は人間を受容するばかりである。つまり相互に受動的であり、依他的なのだ。

収穫儀礼の慣習化とは、なるほど「和解しがたい関係」の偶然的な「折り合い」に違いなく、そもそもこの「関係」を通してしか、世界に人間も自然も定位されえない。森も人間も「人間化」を経巡る動態において依他的に表出する。人間と自然とが存在するという事実の中に、〈対立〉も〈共生〉も既定されてある。その意味で、人と協同する森たちと収穫儀礼を確立する開拓民とはよく似ており、「狼森と策森、盗森」において森たちは理想化されていないし、人間も自然とは背反的な悪とされてもいない。

○あらすじの分析 では、生徒たちのあらすじの検討に入る。まず〈隠されたストーリー④〉についてである。

【6】それからというもの、粟餅を置くのが毎年の行事となりました。[1a2b1c2]

【7】ある日、そばに花が咲いた秋に、子供四人がさわられ、秋の末の喜びを感じてい

読みとり付加型あらすじ作成

ころ農具が無くなった。霜がおりたころには粟がなくなった。これはすべて秋で収穫後なのである。それは収穫した物を届けることをさせるためだ。土地をもらっているかわりに収穫物の一部をわたすという関係が成り立つようになっていく。〔1a2b1c2〕

- 【8】秋が来ると、人々が豊作を喜んでいるところに、子供たちが消える事件があった。(中略)翌年の晩秋人々がさらなる豊作を喜んでいるところに、農具がすべて消えてしまった。(中略)さらに翌年の秋、人々が大豊作を喜んでいるところに、粟が全てなくなるという事件が起き(中略)それから人々は、すっかり森と友だちになって、毎年、冬のはじめに粟餅をお供えするようになった。〔1a2b1c2〕

粟餅を供出するようになることへの言及は、156名(73%)。現代にまで続く収穫儀礼の縁起とする【6】のようなあらすじは4名(2%)である。続発する事件に晩秋という时期的な共通性を見出し、収穫儀礼にまで結びつける明確な文脈設定をするのは、【7】、【8】の2名(1%)であった。

次に〈隠されたストーリー⑤〉について。

- 【9】朝納屋のなかの粟が全部なくなっていたのです。みんなはすきなえ物を持って探しにいきました。〔1a2b2c4〕

「え物」に言及したのは、2名(1%)で、そこに開拓民の険悪な気持ちを読みとったあらすじは無かった。開拓民たちの自然に対する反抗がうかがえる箇所については、気づきにくかったかと思われる。

- 【10】そこでどの森にも粟餅をふるまった。しかし盗森にはしかえしの意味をこめて砂を入れた。〔1a1b2c4〕

「砂」の混入について言及したあらすじは13名(6%)、砂の混入に盗森への仕返しの意味を読みとったあらすじは、【10】をはじめ2名(1%)となる。

○分析結果まとめ 粟餅を供出するようになるとする点は、多くのあらすじで言及される(73%)一方で、季節を春・夏とする誤読自体も目立った。このため収穫儀礼の確立という〈隠されたストーリー〉への言及が少なくなり、現代にまで続く儀礼の縁起とするあらすじが少数にとどまったと思われる(2%)。種粟という相違についての記述も、雑穀に関する専門的知識の援用に依存的な解釈になるが、本来なければならないところであろう。近接する相違の連関の読みとりが課題であることが、ここからも分かる。

〈隠されたストーリー⑤〉について。先行研究に沿って、農民たちが森に三度赴く際の、「色々の農具をもつて」・「こんどはなんにももたないで」・「てんでにすきなえ物を持って」という、持ち物について、および、盗森の粟餅への砂の混入という、農民達の森への姿勢が険しくなっている、収穫儀礼の確立にあたっての紆余曲折が、「え物」への気づき(1%)、砂の混入への気づき(6%)と、読みとりが不十分だ。やはり相違への着眼が課題だが、特にこの小説のように、出来事の繰り返しといった形式では、意識化させたい。

以上、近接する形象間における連関 (a1b1、a1b2) と、遠隔の相違 (a2b2) の意識化という課題が明確になった。

第3章 「単独」の読みとりに対する評価 ：「狼森と笹森、盗森」における入植の起源化の仕方

(1) 近代における非自然化：「単独」の読みとり

○近代化する社会—〈隠されたストーリー⑥〉 黒坂森の巨巖の口から最後に、近年農民たちが供出する粟餅が縮小化した事実が語られる。「しかしその粟餅も、時節がら、ずいぶん小さくなつたが、これもどうも仕方がないと、黒坂森のまん中のまつくろな大きな巖がおしまひに云つてみました。」、と。この「時節がら」とは何時なのか。開拓民たちがどういったつもりで粟餅を小さくし、黒坂森の大きな巖はどういった気持ちで「これもどうも仕方がない」と言ったのか。文脈上明らかに唐突であり、むしろ外部の情報の参照を積極的に促す、テキストの外部へと開かれた箇所と言える（本稿の分類ではⅡハ）。この縮小化は、入植三カ年のあいだの人間の反抗とは別に、語りの現時としての近代における、人間の自然への違背と捉えるべきなのか。

先行研究によれば、粟餅の縮小化は「儀礼の衰弱と形骸化」（赤坂憲雄（1993），p.124）と捉えられるのだろう。そして2章(2)で指摘したとおり、「人間のずるさへの批判、そして諦念」（中野隆之（1993），p.215）、「交換価値としての自然の脅威が小さくなった」（澤田由紀子（1995），p.88）、「人間の驕りやずるさ」（関口安義（2008），p.206）など、自然と人間を相互排他的に捉え、人間側の要因を批判的に見出すわけだ。思うに、「貨幣」の件があるので、語りの現在が近代であるのは間違いなく、近代化の影響を指摘する流れとなっている。だが、このようないわば近代化批判・人間批判を読む場合でも、大きな巖が「これもどうも仕方がない」と答えている点は、拘ってもいいのではないか。（2章(2)で提示した、収穫儀礼の慣習化における森の自発的な庇護者としての態度決定という論点に関わるのが、ここである。）

「仕方がない」という巨巖の言葉を単なる諦めと理解すべきなのか。それは、人間が自然に「仕方がない」と言わせるほど、巨大な存在だと信じられていることを意味するが、「狼森と笹森、盗森」がそうした人間／自然理解を提示する小説だとは思えない。むしろ物語世界内の森たちの協同する姿を考えた時、大きな巖や森たちは人間たちに変わず優しく、彼等を承認しているとすべきではないか。つまり「仕方がない」と言うのも、それは森たちの選択だということだ。当然森たちには承認しない選択もできようからだ。無論、この場合自然は人間に都合の良い自然ではなくなる。しかし「狼森と笹森、盗森」では自然を「岩手山」を頂点として階層化して造形しているのである、ならば自然の人間に対する優位性は同作において自明の前提なのではないか。

そして、あらためて自然の選択可能性という点に想到すると、逆に人間の側も自然の優しい心情をまだ裏切らずにいることに気づく。例えば、語り手「わたくし」からの、黒坂森の大きな巖への取材の謝礼が既に粟餅でなく「貨幣」であったとおり、人間が貨幣経済に浸潤し非自然の傾きを見せたにせよ、大きな巖の話に耳を傾けるのも、これまた人間に違いないという事実一つとっても、そうである。人間と自然の、決して順調ばかりではな

い、互酬的な関係性の構築の歴史が仄見えてこないだろうか。森たちは往時と同様人間たちを承認しており、人間たちもまたどうであれ栗餅を供え続けてきたのであり、供え続けていくのである。人間は自然との斯かる意味での関係性から自由になれる訳ではない。

2章(2)で提示した開拓民と森たちとの相同性という論点から引き続く、近代化の栗餅の縮小化にも見出せる互酬的な関係性という理解が重要なのは、それが批判する主体の問題に関わるからである。人間は超越的に(自然の、そして人間の)「人間化」を批判できるのか。そうした視点が無いと、物語世界内の開拓民たち、のみならず語りの現在である「わたくし」たちについても、誤った先入観を持つことになりかねない。自然の選択可能性を顧慮しない人間批判は、どこか人間中心で感傷的だと言わざるをえないと思うのである。

以上より、供出する栗餅の縮小化にみる、恐ろしい自然からの(森たちの許容しうる限りでの)人間の近代的自立が〈隠されたストーリー⑥〉である。着目すべきは、栗餅の縮小化と、「仕方がない」という黒坂森の巨きな巖の承認とである。

○あらすじの分析 では、〈隠されたストーリー⑥〉に関するあらすじの分析に入る。

- [11]そしてその後「時節がら、栗餅もずるぶん小さくなった」から自然と人との共存がうすくなってきていると感じた。〔Ⅱハ〕
- [12]その栗餅も、時節がら、ずるぶん小さくなったが、これもどうも仕方がないと黒坂森の巨きな巖がしまひに云ってゐました。昔は人間と自然が共存していたが、今は森林破壊などで栗などの物も少なくなってしまうと考えられる。〔Ⅱハ〕
- [13]栗餅がしだいにどんどん小さくなっていっているため、森のめぐみが少しずつなくなってきているかと思う。〔Ⅱハ〕
- [14]しかしその栗餅も人間たちが少しずつ森を出ていくせいでずいぶん小さくなったが、これもどうも仕方がないと黒坂森のまん中のまっくろな巨きな巖がおしまひに云ってゐました。〔Ⅱハ〕
- [15]しかしその栗もちも人間が自然からはなれていくためかずいぶん小さくなったが、これもどうもしかたないと大きな巖がおしまいに言いました。〔Ⅱハ〕
- [16]しかしそのもちがだんだんちいさくなっている。自然への敬いがうすれてきているから。しかしそれは仕方がないと巖は言っていました。〔Ⅱハ〕
- [17]それから人々と森は仲が良かったが、ある時からそんな森への気持ちが子孫に伝わらなくなっていき、ただの伝統となってしまった。〔Ⅱハ〕

栗餅の縮小化への言及は、67名(32%)。読みとりとして妥当な範囲での栗餅の縮小化の理由への言及は、9名(4%)。また栗餅の縮小化を黒坂森の巨きな巖が承認することへの言及は、45名(21%)。黒坂森の巖が承認する理由について言及したあらすじは無かった。

○分析結果まとめ さて活動評価であるが、結末の、外部となる栗餅の縮小化への言及は、文脈化しづらいことを勘案すれば決して少ないとは言えない(32%)。読みとりに踏み込んだのは【11】～【17】などと、少数にとどまったのは(4%)、むしろ読みとり付加型のあらすじ作成というものへの不慣れさに起因する面もあろう。環境破壊や生活形態の都市化か、それによる自然資源の枯渇か、そしてそれに起因する自然の比重の低下、共存の減

退、結果としての収穫儀礼の形骸化など、多分に生徒の推測に拠るだろうが、既述の解釈に照らして必ずしも的外れとは言えないものだった。一方黒坂森の大きな巖が最後に栗餅の縮小化を「仕方ない」とする箇所についての言及も多くはなかった(21%)。これは栗餅の縮小化に比べ、大きな巖の心情理解が推測困難だからであろう。ただしこの台詞の看過は、先行研究にも見られた傾向でもある。

以上、作品の結末には、読みとりから解釈へと拡大させる、暗示的・示唆的な工夫があることは、一層意識するよう促す必要はあるが、際立つ単独の場合、むしろ生徒らも気づきやすいとは言えるだろう。

(2) 開拓の起源における同語反復と相対化：前後照応の読み取り

○起源の起源化としての「地名起源」—〈隠されたストーリー⑦〉—では、なぜこの大きな巖の語りという枠に近代の不協和音を書くことが必要だったのか。人間と自然との違和という賢治研究の問題系があるのは承知しているが(山内修(1991)、赤坂憲雄(1995))、先にもう一点「狼森と笹森、盗森」の読みとりで考慮したい点がある。「地名起源」という作品の枠である。

この小説は、黒坂森の大きな巖からの聞き書きとして、注目すべき前後照応の形式が認められる。まず「地名起源説話」型童話の体で小説は始まる。「この森がいつごろどうしてできたのか、どうしてこんな奇体な名前がついたのか、それをいちばんはじめから、すっかり知つてゐるものは、おれ一人だと黒坂森のまんなかの大きな巖が、ある日、威張つてこのおはなしをわたくしに聞かせました。」、と(本稿の分類では、Ⅱ口)。だが「狼森と笹森、盗森」研究で既に指摘されるとおり、出来事が単純に地名の由来になってないことは明らかだ。「狼森」の初出は森の狼達自身が「狼森のまんなかで」と歌っていた歌詞であり、その後は開拓民にとって「笹森の笹はもつとも」、「名からしてぬすと臭い」と名前が事件の前提にさえなっていく。

森の擬人化についてはすでに言及したが(2章(1))、この森の擬人化を、小森(1996)が指摘するような「人間の側の慢心」(p.65)の結果、自然が平準化されるといった否定的な意味での「人間化」された存在でも、厳密に宗教的な存在でもないと考えるのは、この「地名起源」に関連した擬人化であるからだが、従来ことさら森の擬人化が意味化されるのは、そもそも「地名起源」としての斯かる不完全さに起因していよう。

まず命名が存在に先行する矛盾に対する先行研究の見解から概観する。谷川雁(1985)では、「地名起源」とは開拓民の苦難を起源とする「年中行事の祭り」の幼児の記憶(p.57,82)が森の側からの語りへとスライドされたものとする。小森陽一(1996)では、農耕から私有財産制まで「人間社会の歴史的発展過程」が描かれていると解釈する立場から、「それぞれの社会構造にみあった「形」で、人間が自然を名づけている」とされる(p.72)。つまり「地名起源」という枠は、共同体の行事紹介ないし社会発展の比喩と考え、それによって「地名起源」の文脈の破綻を軽減させようというのであろう。しかしそれでは「地名起源」の瑕疵を是正する説明とはなっても、なぜ「地名起源」でなければならなかったのかという理由の説明とはなっていないのである。

それならば、大きな巖の言葉どおり「地名起源」と受け取ってはどうか。

小森陽一(1996)でも、「アイヌの人々が名づけていた地名」を漢字表記に改めた事実を

挙げ、命名には「侵略と植民の歴史が刻まれてもいる」という指摘があった (p.38)。重要なのは、「侵略」といった人間の暴力性よりも、命名以前に (異なった言語体系のなかで) すでに地名がありうる事態を示している点だ。赤坂憲雄 (2006) では「土地の名づけとは、人間のがわが一方的に大地に押し付けるものではありえない。むしろ、大地にはすでに名前が宿されてある。」 (p.137) とする。たしかに「地名起源説話」とは本質的に同語反復的であることが不可避なように思う。名前を有しなかったモノに、ある時から言葉を付与する、そんな名称目録的な「地名起源」の方が、(そうした言語事実はあったとしても) 言語の実相からはズレるように思う。「狼森」以前にオイノモリがあった。つまり、アイヌ語起源の地名と同様、オイノモリ (自然の体系) が「狼森」 (人間の体系) へと反復・再編されるというような事態が想定される。言語事象とは、言語化と意味化とを同時に実現する。地名の名づけと、開拓民たちおよび森たちの「人間化」の推移とは、軌を一にしている。

しかしそれでも、何も語り手によって、実際にアイヌ語起源の地名のように、オイノモリなる言語が客観的に想定されていたわけではないだろう。あくまで虚構として同語反復的な「地名起源」が採られている。語学的に客観的な「地名起源」なわけではないのだ。

だとするなら、森の名のもじり (詩的機能) から自由に森の住人が着想され、開拓民との間に事件を構想する、そんな、遊戯的に「人と森との原始的な交渉」における農民の中に刻まれた「永い間の印象」を豊かに有意味化する仕掛けではなかったかと考えるのである (『注文の多い料理店』広告らし)。起源の現実化は言語化以前を想起する困難に似るだろう。それを逆手にとって〈起源〉の定着を虚構化しようというのが、この小説の体裁のもつ意味であったと考える。そうした理解は、「イーハトヴは一つの地名で夢の国としての日本岩手県であります。」 (宮澤賢治『注文の多い料理店』広告らし (小)) という、イーハトヴ観に相即しよう。

そこであらためて、なぜ近代の不協和音を持ち込んでまで巨きな巖の語りが必要であったのかである。すでに森たちの選択的承認と人間に違背がない点は確認した (3章(1))。本稿では、近代の不協和音は、「地名起源」の遊戯性に基づく起源の虚構化という文脈に回収されるものと考えている。

遊戯的な森の名のもじり (詩的機能) と人間批判 (粟餅の縮小化) とではいかにも不釣り合いに思える。しかし巨きな巖による近代についての言及無しに物語世界を造形するならば、森にまつわる起源は現在のこととして表現するしかない。起源は現在化された時、逆説的だが、否応なく幸福であった起源性を失う。あるいは、その現前性ゆえに起源が身近に知覚されるかわりに、往時が反復可能に錯覚されて、相対的に起源としての価値を減退させると言っても良い。語りの現在 (近代) による相対化 (近代の不協和音) があればこそ、入植当時を遠い回想のなかで起源化し得る、そんなパラドックスがある。近代の不協和音の前景化こそ、入植当時の起源を理想的に起源化し、「地名起源」の書き換え (虚構化) を可能にするというわけだ。「地名起源」も、近代の不協和音の前景化も、率直に入植当目を好ましいと思える形で起源化することを意味していたと見られる。小岩井農場が開設されたのは、明治24 (1891) 年1月である。以後、岩手南麓の不毛な火山灰地に一大農場が形成されたようだ⁽⁸⁾。この地の開拓者は実際には「狼森と策森、盗森」の開拓民ではなかった。同語反復 (地名起源) と相対化 (粟餅の縮小化) が、「狼森と策森、盗森」なりの起源の定着として理に適った方法と思われたのではなかったか。

以上、開拓初期の人間の自然との間に起こった衝突と、近代化後に生じた農業中心の生活習慣の衰微など紆余曲折ありながら、共同体の今がある。この今に続く互酬的な関係を前提に、共同体成立の起源を起源化し、小岩井の記憶を（再生ではなく）新生させる小説と見られるのである。

以上より、共同体が形成されたことの幸福な起源化が〈隠されたストーリー⑦〉となる。

○あらすじの分析 まず冒頭の「地名起源説話」を摘記するあらすじは107名（50%）。小説冒頭・結末問わず、「単独」は意識化し易いと言えるかも知れない。

次に、後段、森たちがその名前を語られる件は、今度は冒頭の額縁との連関の前後照応〔I a1b1〕となる。実際あらすじを書き進めながら、冒頭との首尾一貫を図る生徒もあった。

【18】大人たちは狼たちを追いやりましたが、栗やきのこをご馳走してもらったことを知り、栗餅を置いて行きました。このことによって狼森と名付けられました。

〔I a1b1c1〕

【19】農具を箆に入れることによって箆森だと言ったこと。〔I a1b1c1〕

【20】ぬすとのいる森で盗森と名づけた。〔I a1b1c1〕

上記【18】～【20】のような、「地名起源」との整合性をつける前後照応は25名（12%）という結果だった。

問題は、巨巖の語りが「地名起源」の矛盾を示す点だ。近接の連関の読み取りに不十分さが示された以上、「単独」だけでなく、前後照応といった連関する形象相互に距離がある場合でも、読みとり困難な状況が予想できる。結果的には、「単独」の場合とは逆に、意識化が十分でないという結果となった。巨巖の語る人間と森たちとの交渉以前から名前があるという点に気づいたあらすじは確認できなかったのである。ただし冒頭の「地名起源」の額縁の前後照応を、にもかかわらずそれを逸脱するストーリーを指摘する【21】、【22】のようなあらすじは、先行研究（谷川雁（1985））にもあった論調であり、「地名起源」の矛盾に幾許か気づいていると認めてよいだろう。

【21】世の中「名が体を表す」ということは確かではあるが話してみれば解りあえ、打ちとけることができるということをこの話は伝えたかったのだと思います。〔I a1b1c6〕

【22】きっとこの岩は、地名の由来だけではなく、一人いいことがあると、みんなうらやましく思うので、一人じめするのではなく、みんなにわけあうべきであるということも私に伝えたかったのだろう。〔I a1b1c6〕

○分析結果まとめ 同時代状況であれ、小説自体のコンテクストについては、どんな言及も許容したいので、勿論【18】～【20】のような首尾一貫を図る前後照応でも読みとりとして評価したい。しかしそのためにも、小説の外部への読みを示唆するような開かれた表現箇所に着目することが必要だ。その点で、前後照応の矛盾に読みとりが及ばなかったのは課題だ（0%）。「単独」（額縁）の場合とは対照的で、形象相互に距離がある場合（前後照応）が、あらすじ活動の課題となった。

第4章 結び—読みとり付加型あらすじ作成活動の課題

以上、2、3章にわたって、あらすじ作成活動の初期段階における読みとりの課題を、第一回「狼森と笹森、盗森」から抽出した。その結果、冒頭・結末の「単独」（額縁・外部）は意識化しているものの、むしろ近接の連関〔I a1〕、遠隔の連関としての前後照応〔I a2〕への意識づけが、課題として浮き彫りになった。あらすじ活動期間中、評価シートでの各生徒のあらすじ評価、あるいは学年全体のあらすじからの抜粋集などによって、各生徒が、連関に基づいた読みとりのありようを参照する機会を作っていた。

今後の課題として、こうした取り組みによって、第二回「水仙月の四日」以降、生徒の読みの偏向にいかなる変化が生じるかを、見極めていきたいと思う。

〈注〉

- (1) 小説を読む際、記されている形象を他の形象との連関において意味化することは不可避である。その認識の工程を、何らかの外部情報の参照も要する狭義の解釈と区別し、本稿では「読みとり」と称している。読みとりは、物語世界内の要素と要素との結節点を見出すことである。と同時に、書いてないことの意味化には客観的な妥当性が認められねばならない。その意味の読みとりの妥当性を証するのは、また別の細部である。（ただし、言うまでもなく外部と物語世界内とは地続きであり、截然と区別できるわけではない。）
- (2) 本文は、『宮沢賢治全集8』（ちくま文庫、昭和61・1）に拠る。
- (3) 「かしはばやしの夜」における「《自然》の側の拒否」・「現実の関係性の違和」という解釈枠（山内修（1991）、p.68,69）を「狼森と笹森、盗森」にも当て嵌めるわけだ。
- (4) 小森陽一（1996、p.39）では、そうした森のあり様は、命名による「分節化」の「不要」を表すとされる。しかし「おれはおれだ」という姿勢がすでにして「分節化」でないだろうか。
- (5) 研究史ではおおそ支持された観のある谷川雁（1985）における「神人共食」だが、一方で「神人共食」という「共同体の行事」が、物語世界では「幼児の眼に焼きつけられた一回かぎりの体験」（p.71）として描かれたとした裏読みの部分はその後採られておらず、本稿でも通説に倣って「共同体の行事」の戯画ではなく原型と捉えている。
- (6) 盗森の粟餅への砂の混入は「こどもらによって作られる」（谷川雁（1985）p.82）ことで生じた偶然の結果だとの読みも、弥縫策との印象を禁じ得ない。盗森が悪戯を許されて人間が許されない道理もない以上、強いて岩手山への違背と考えるまでもない、頑是無い悪戯だと解しよう。例えば自然に対し人間が悪だとする人間批判論が自然を貴んでいると言えるだろうか。斯様な人間の自己批判は、自己陶醉の逆説的な表れとも言い得る。小森陽一（1996）における、「ジェノサイド」という解釈はその前提を私有財産制による「共同性にある亀裂が入りはじめている」という読みにかかっている。その根拠は「てんで」という表現のようだ。当初「みんな」だったのが、「おらの粟」、「おらの道具」と。だが、人間が入植の許諾を求める場面でも「てんで」とある。ややマルクス主義的歴史観に寄った解釈かと思われる。
- (7) しかし赤坂憲雄（1993）では、入植三カ年の衝突に「根源的な異和の風景」（p.123）も指摘しており、語りの現在（近代）における人間の違背を指定する理解も示している。

岡田浩行

- (8) 日本経営史研究所(1998)によれば、創業者井上勝、出資者岩崎弥之助、後援者小野義真によって創設された。なお同書は、小岩井の地が「一望千里の荒蕪地」であったこと、「奥羽山脈を越えた寒い北風が、文字通り吹きおろしてくる」こと、「今日そこに展開している「自然」の景色は、ほとんどすべて小岩井農場百年の人間の営為が、太陽と雨と土の恵みを受けながら、創り出したものである」ことを記している。

〈引用文献〉

- 赤坂憲雄(2006)「狼森と策森、盗森」『国文学解釈と鑑賞』71(9)
一(1995)「イーハトヴを探して」赤坂憲雄・吉田文憲編著(1995)『『注文の多い料理店』考』五柳書院
一(1993)「山の神の祭り」『宮沢賢治』12
一(1990)「神隠し譚」『現代詩手帖』33(3)
大類雅敏(1993)『文章の作り方』ぎょうせい
岡屋昭雄(1995)『宮澤賢治論』おうふう
工藤順一(2010)『文章術』中央公論新社
工藤順一・国語専科教室(2007)『これで書く力がぐんぐんのびる!!』合同出版
小森陽一(1996)『最新宮沢賢治講義』朝日新聞社
佐々木高明(1971)『稲作以前』日本放送出版協会 ※引用は、佐々木高明(2014)『新版稲作以前』NHK出から。
澤田由紀子(1995)「『狼森と策森、盗森』考」赤坂憲雄・吉田文憲編著(1995)『『注文の多い料理店』考』五柳書院
関口安義(2008)『賢治童話を読む』港の人
谷川雁(1985)『賢治初期童話考』潮出版社
続橋達雄(1972)「盗森の盗み」『賢治研究』12 ※引用は、続橋達雄編(1975)『宮澤賢治研究叢書6『注文の多い料理店』研究Ⅱ』学芸書林から。
一(1957)「童話集『注文の多い料理店』序説」『四次元』84 ※引用は、続橋達雄編(1975)『宮澤賢治研究叢書5『注文の多い料理店』研究Ⅰ』学芸書林から。
中野隆之(1993)「狼森と策森、盗森」『宮沢賢治』12
日本経営史研究所編(1998)『小岩井農場百年史』小岩井農場
山内修(1991)『宮澤賢治研究ノート―受苦と祈り』河出書房新社
吉村綱編(2005)『日本語と表現の工夫』双文社出版